

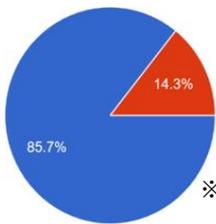
自殺予防教育プログラム実施報告書

学校名	北海道松前高等学校
-----	-----------

(1) 教職員間の共通理解を図る研修等の実施

研修等の実施日	令和5年(2023年)6月6日(火)	研修参加人数	12人
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ アセスメントツールを活用した生徒個人及び集団の分析と今後の対応について、養護教諭を講師に、教職員全体で以下の内容を協議した。 <ul style="list-style-type: none"> ・学級集団の中で、不安傾向が強い、孤立感のある生徒への対応 ・アセスメントツールの過去の結果から大きく変化している生徒への対応 ・学級の中で配慮が必要と思われる生徒への対応 		
研修に参加した教職員の声	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職が生徒個人及び集団の対応について一緒に考えてくれて、とてもありがたい。 ・自分の学年だけでなく、他学年の生徒についても情報交換や共通理解を図れるので良いと思った。 ・生徒の状況について共通理解を図れる研修が年度当初にあると良い。 		
研修等で使用した資料名	<ul style="list-style-type: none"> ・「児童生徒の自殺を予防するためのプログラム」(道教委) ・「自殺予防教育の実施に向けて(その1)」(道教委) ・「自殺予防教育の実施に向けて(その2)」(道教委) ・子どもたちのSOSを受け止めるために(道教委) 		

(2) 「自殺予防教育プログラム」の実施

	実施状況(主な実施内容、アセスメントツール等による生徒の変容、生徒の感想等)	
A 援助希求的態度の育成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実践の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・全校生徒に対し、5月と10月に年2回、全教職員による全校生徒との教育相談を実施した。 ○ 生徒の変容を促す工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・面談を実施する前に、面談をしてもらいたい教員及び話したい内容等についてアンケートを行うことにより、生徒が気軽に話せる環境づくりに取り組んだ。 ・教職員が、担当した生徒の新たな一面を知る機会とすることを目的のひとつとした。面談後は、面談記録を全職員で回覧して全体共有したことにより、生徒に対し、より適切な対応ができた。 ○ 生徒の変容 <ul style="list-style-type: none"> ・2回の教育相談の実施後に生徒にアンケートを実施したところ、「担当の先生とこれからも話をしたい・相談したいと思いますか?」という設問に対し、8割以上の生徒が相談したいという回答をした。 ○ 生徒の感想 <ul style="list-style-type: none"> ・面談を通じて、先生の経験を聞くことができ、非常にためになった。 ・自分の考えを整理できたため、やるべきことや進路について改めて考えることができた。 ・自分で希望した先生だったので、緊張せずに、自分の悩みについて気軽に話すことができた。 	 <p>※生徒アンケート結果より</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 話をしたいと思うし、相談したいと思う (85.7%) ● 話のみしたい (14.3%) ● 相談のみしたい ● 話をしたいと思わないし、相談したいと思わない
B 早期の問題認識	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実践の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・自らの心の危機を早期に認識し、心身が不調なときに対処する力を育むことを目指し、地歴公民科、保健体育科及びスクールカウンセラーが連携して、1年生では「適応・不適応と精神疾患」及び2年生では「社会的自立・職業的自立を目指したキャリア形成」について、スクールカウンセラーを講師として、心理学講話を実施した。 ○ 生徒の変容を促す工夫 <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを用いて、個人思考を行うことにより、自分の心と向き合った。また、その内容を共有し、お互いへの理解を深め合うグループワークを授業内で多く取り入れた。 	 <p>【心理学講話の様子】</p>

B 早期の問題認識 (心の健康)

- 生徒の変容
 - ・心理学講話の前後でアセスメントツール「ほっとプラス」を実施したところ、1年生では変化が見られなかったが、2年生の「楽観思考・将来期待・他者理解」の3つの数値が上昇した。「楽観思考」と「将来期待」については、将来のより良い自分を想像させるワークを実施したことにより、数値が上昇したのではないかと考える。また、他者理解については実施した心理学講話はもとより、本プログラムで実施した他の内容や日々の学校生活等の経験から数値が上昇したのではないかと考える。
- 生徒の感想
 - ・精神疾患の症状について、たくさんあることを知ることができた。自分の体調管理をするとともに、周りの体調も気にしたいと思った。(1年生)
 - ・フロイトの超自我、エス、自我のうち、自分の場合はどのが強く現れているのかを考えたり、自分を守るためにどのような心の反応をしているのかを考えたりして、良い経験になった。(1年生)
 - ・自己理解は、単に自分について知るだけではなく、このことを通して将来仕事を選ぶときや、何をしていきたいかを考えるときなどに役立つ大事なことだと思った。今回の講話を通して、改めて自分について気付くことが多く、グループ交流があったことにより、ほかの人の理想の生き方についても知ることができた。(2年生)
 - ・自己理解を通して自分には何が足りないのか、自分はこれからどうするべきなのかを考えさせられた。今回考えたのは「5年後の自分」だったが、5年後の将来像を実現するために、今できる努力をしたいと思う。(2年生)

	楽観思考	将来期待	他者理解	脱破局化	合計
2回目の平均	59	55.9	58.9	54.2	59.5
1回目との比較	6.1	1.9	3.5	-1.1	4

C ストレス対処能力の育成

- 実践の概要
 - ・自己理解及び他者理解を深めるとともに、自分を表現する力や自己肯定感を高めることを目的に、5月初旬にHR活動(全学年一斉指導)においてコミュニケーションカードを用いたワークショップを実施した。
(講師：株式会社 地球はメリー・ゴーランド 田村 睦美氏)
- 生徒の変容を促す工夫
 - ・外部講師を活用し、生徒が専門家の話を聞いて、新たな価値観や発見できる授業になるよう設定した。
 - ・町内には、子どもが少なく、幼少期より人間関係が固定化されていることに課題があったため、人間関係の活性化を目的として、複数の学年を混合させたグループを編成し、グループワークをすることにより、交流が深まるようにした。
- 生徒の変容
 - ・アセスメントツールHyperQUを用いて、ワークショップ実施後と前年度(10月下旬実施)の結果を比較したところ、「かかわりの尺度(能動的に他者と関わる姿勢の度合いの項目)」、「配慮の尺度(他者を尊重する姿勢が行動レベルで実行されているかを見る度合い)」において、2年生では17名中3名、3年生では23名中5名の数値が上昇していた。さらに、半年後の結果では2年生で5名、3年生で7名の数値が上昇していた。ワークショップを通して、相互に自己を表現し、受け入れられる体験をしたことにより、自己理解・他者理解をするきっかけとなり、長期的に数値が上昇したのではないかと考える。
- 生徒の感想
 - ・カードを使って自己紹介をしたことにより、自分の長所・短所を見直すことができたと思う。
 - ・他学年との交流をしたことにより、とても楽しくコミュニケーションをとることができた。自分が周りからどのように思われているか知ることができたため、よりよい自分を目指して自己を大切にしていきたい。
 - ・自分の心の在り方について、カードを通して考えることにより、自分自身の意外な一面に気づくことができて驚いた。
 - ・自分がどのような人なのかを改めて考えることができた。その結果から、今後どのように行動していくと良いのかを考えるきっかけにもなった。



【ワークショップの様子】

